Close Up クローズアップ 交通教育センター②

2017 トラフィック セーフティ・フォーラム in 埼玉 開催 テーマは「安全運転へのアプローチ」

開会の挨拶をする佐竹正規・（株）レインボーモータースクール代表取締役社長

昨年 11 月 24 日、埼玉会館（埼玉県さいたま市）で「2017 トラフィック セーフティ・フォーラム in 埼玉」が開催された（主催：交通教育センターレインボー埼玉・和光）。このフォーラムは、交通安全活動に取り組む企業や団体を対象に事故防止の施策などの情報交換を目的に開かれており、企業・団体から約 300 名が参加。開会にあたり、主催者を代表して佐竹正規・（株）レインボーモータースクール代表取締役社長と、来賓を代表して遊間宏志・埼玉県警察本部交通部長が挨拶した。

まず、交通事故防止活動の好事例として、（株）C&F ロジホールディングス 安全管理部 熊坂義明さんと帝石パイプライン（株）環境安全室 後藤貴浩さんが、各々の社内における安全への取り組みを紹介した。

事例発表

トラックの全乗務員が実技研修を受講
（株）C&F ロジホールディングス

同社は冷凍食品やチルド食品の物流事業を手がけている。これまでトラックの全乗務員に対し、座学での研修を実施していたが、昨年度から交通教育センターレインボー埼玉などでの実技研修を加えた。「実車を使って普段できない訓練ができるので、乗務員にも好評で効果も出ています」と熊坂さんは述べた。また、指導者である運行管理者向けの研修では、ドライブレコーダー（以下、ドラレコ）が記録した映像や情報から、事故につながりやすい乗務員の不安全行動を見つけ出すためのノウハウを伝えていることを説明した。これをもとに運行管理者が改善に向けたアドバイスを行うことで、乗務員の安全意識を高めているという。

動画による教育で交差点事故をゼロに
帝石パイプライン（株）

同社は約 300 万世帯にガスを供給するのに必要なパイプラインの運用・維持管理を担う企業だ。パイプラインの点検などパトロールのためにクルマを使用している。同社では交差点での事故が多いことから、2016 年 3 月に「交差点の安全確認」という映像教材を作成。内容は、ウェアラブルカメラを使って、運転者と事故の相手側が互いにどのように見えているか撮影した動画をもとに、ドライバーの視野を検証するものとなっている。「この動画を社内で配信して以降は、交差点での事故は発生しなくなりました。わかりやすく、記憶に残り、理解が深まるようです」と後藤さんは動画による教育の効果を話した。

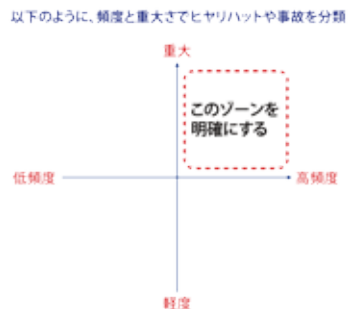
講演

「省略」と「先行」を防ぐための教育が必要

事例発表の後は、東京海上日動リスクコンサルティング（株）主席研究員 北村憲康さんによる講演。「事故を減らすための安全運転教育」として、ドラレコの活用方法を解説した。北村さんは、まず安全運転教育を実施する前提として、事故原因と事故対策の考え方を企業内で共有しておく必要があると強調する。「物損事故も含めた交通事故の約 60%はドライバーの安全不確認が原因です。では、安全不確認はなぜ起こるのでしょうか。それは安全確認すべき箇所を『省略』してしまうことと、安全確認する前に操作を始めてしまう『先行』だと考えられます。つまり、この『省略』と『先行』を防ぐための教育が必要なのです」。さらに、事故対策の考え方のあるべき姿として、企業活動中の事故は、当該企業の商品やサービス同様、本業の品質の一部であり、人命にかかわる交通事故は優先度を上げて、企業自らが安全対策と教育を実践する必要があると訴えた。

ヒヤリハットや事故は頻度と重大さで「意味づけ」を

現在のドラレコを活用した安全運転教育は、ヒヤリハットや事故の「もぐらたたき教育」が多いのではないかと北村さんは指摘する。「ドラレコの映像は、1 ヵ月単位など一定の期間を区切って時系列で見ていくことが多いと思いますが、これだけでは不十分といえます。ドライバーに見せるヒヤリハットや事故の映像は、頻度と重大さで『意味づけ』（下図参照）しておくことが必要です。特に、このリスクは絶対に防いでほしいこと（頻度が高くて重大なゾーン）を明確にしてあげることで、ドライバーの安全行動が強化されやすくなります」。



さらに、ドラレコの活用には課題もあるという。「急操作場面を抽出して、それに対してフィードバックすることが大半でないかと思いますが、急操作は一般的に相手があって起きるものです。この急操作はリスクの氷山の一角でしかなく、その下に漫然運転や脇見、一時不停止といった相手がいないケースでの不安全行動が眠っています」。

不安全行動を生み出すドライバーの本質的なリスクを見抜くために、北村さんはドライブレコーダーから抽出した映像による教育の 5 つのポイントを紹介し、安全不確認の原因である「省略」と「先行」を防止するための安全運転習慣について説明した（下記参照）。また、こうした教育を行う前提として、管理者が各ドライバーの性格や健康状態などを把握できるくらいまでのコミュニケーションをとることが大切であると述べた。

東京海上日動リスクコンサルティング（株）主席研究員 北村憲康さん

●映像教育の 5 つのポイント

①事故多発環境での通過行動に注目せよ（交差点）
危険予測を安全運転に活かしているかをチェックする。信号機のない交差点で自車が優先道路を走っている時や、施設の出入口を通過する時に安全行動をとらないケースがある。

②直進・右折は加速、左折は減速を見よ
右折中の加速レベル、左折前の減速レベルが大きいドライバーは安全確認の時間が短くなるため、安全確認を「省略」したり、操作を「先行」させてしまう。

③危険認識可能ポイントを特定せよ
既に危険は目の前に現れていて、それを観ていないだけであることをドライバーに気づかせる。

④速度差データを活用せよ
G（加速度）の値の大きい場面だけが危険とは限らない。

⑤頭ごなしは逆効果、コミュニケーションツールの位置づけを
管理者がドライバー一人ひとりと各々 30 分程度の運転映像についてコミュニケーションを取りながら確認することで、添乗指導していることと同じになる。

さらに次の点に注目することで、ドライバーの不安全行動を推測し、行動の改善につなげるアドバイスができる。

基礎

・正しい運転姿勢の維持（車内カメラを設置している場合）
前のめりや反り返った姿勢で運転すると視野が狭くなる。十分な視野を確保するために正しい運転姿勢は重要。

・速度変化の小さい「定」速運転
発進時の速度域に注目する。0 → 40km/h が 5 秒以上かかっているか。5 秒未満のドライバーは速度差の大きな運転をしている可能性が高い。

バック時

・バックギアを入れる前の安全確認
クルマが後退を始めたと同時に後方確認するのでは遅い。

・駐車スペース半分での一時停止
クルマを一気に駐車スペースに入れていないかチェックする。バック事故での自車損傷箇所の半分近くは真後ろで、これは停止位置を誤ったことが原因だと考えられる。

ドライブレコーダーの映像で確認することは難しいので、バックギアに入れる前に降車し車体を 1 周した後、ドライブレコーダーの前で指差し確認するというルールを設けてチェックする。

※講演資料より抜粋